

第31号 2020.4.30 発行
 発行者：株式会社協進印刷
 編集者：JO 編集委員会

社会の“第三極”市民セクターをもっと大胆にダイナミックに

認定NPO法人市民セクターよこはま 事務局長 吉原明香さん



1995年より、横浜社会福祉協議会・横浜ボランティアセンターにて、市民活動支援担当となり、横浜市内の在宅福祉活動団体のリーダーの方々と出会い、その考え方・行動に魅了される。NPO法成立と介護保険開始を前にした1998年「市民セクター構築のための研究会」を立ち上げ、1年後「市民セクターよこはま」が設立される。

2002年より市民セクターよこはま事務局長、2009年〜2020年横浜市民活動支援センター責任者。2020年より横浜市民協働推進センター担当理事・チーフ協働コーディネーター。

<https://shimin-sector.jp/>

江森：新しい市庁舎のオープンに伴って、ということなのかどうかはわかりませんが、市民活動支援センターは今年の2月で終了ということになりました。このセンターもずいぶん長かったですよね。

吉原：私たち市民セクターよこはまが横浜市と協働協定書を締結して運営を担いはじめたから11年、その前は運営委員会、さらにその前にはボランティア協会が運営していました。2000年10月にセンターが開設していますので、約20年ということになります。

江森：2000年ですか、NPO法成立が1998年ですから、やはり当時は市民活動を行政として後押しすることが求められた時代だったということですね。

吉原：そうですね。法律ができたきっかけと言われているのが1995年に起こった阪神淡路大震災で、この年はボランティア

元年とも言われていますが、非営利の活動に法的な根拠を持たせると同時に、行政としても市民活動を支援しなければならぬということ、当時は全国に支援センターができていましたね。

江森：そこで吉原さんたちが市民活動支援を担うわけですが、市民セクターよこはまはどういう経緯で作られたのですか。

吉原：私は以前横浜市社協の職員で、当時あいあい基金（現在はふれあい助成金）の担当をしていました。引き継いだときは約270団体、翌年は400団体に助成していました。申請書だけ見て、現場をみないと事務局の役目を果たせないで、目を養う意味もあって、いくつかの団体に直接伺っていたのです。そのとき訪問した先々で本当に素晴らしい活動をされている方々との出会いがあって、その方たちにとんでもない可能性を感じたんですね。というの

は、基金の担当になる前に地域ケアプラザで介護の仕事をしていて、そこに来ていたおばあちゃんが入院したときにお見舞いにいったことがあったんです。認知症末期の方々が多く入院する昔言う老人病院なんです。そこで入院している方全員がぼかんと口をあけて目を見開いて寝かされている光景を目の当たりにしました。ひとりとして声も出さないし寝返りも打たない。それがそのフロア10室ぐらい全部そうなんです。しかもそのフロアのナースステーションに看護師さん1人しかいない。なんなんだこれかと思って、後日知り合いの看護師さんにきいたら、それは薬でおとなしくさせられていて、ふとんをめぐったらきつと手も足も拘束されてるよって教えてくれたんですね。ちょうど沖繩でひめゆり学徒隊の話や聞く機会があって、当時回復の見込みがない兵隊さんは見捨てざるを得なかつ

たという話を聞いてきたばかりだったので、いま私たちはこんなに平和を謳歌しているけど、人の命の扱いは戦時中と何も変わってないじゃないかって、すごいショックを受けたんです。

その後異動になって、素晴らしい市民活動をしている方々に出会ったものだから、まさに光が見えたんですね。これからの社会をどうデザインしていったらいいのか、どうしたらひとり一人が自分らしく暮らせる社会になるのかという問いに対する答えは、市民活動をしている方々が持っていると思ったんです。

江森：でも当時はまだまだ市民活動団体が行政と対等に話ができるような状況ではなかったのではないですか。

吉原：そうですね。ですから市民活動団体の声をもっと表舞台に出てくるようにしようと、健康福祉局とも相談して「市民セ

クター構築のための研究会」を立ち上げました。「市民セクター構築」というのは、アリスセンターの初代理事長でいらつしやる緒形昭義さんの言葉なんです。研究會立ち上げの呼びかけ文をどう書いたらいいか迷っているときに、この緒形さんの言葉がすーっと降りてきて、そうだ行政と対等に議論ができる「第三極」を作るんだと確信できたんですね。研究会を1年やったあと、自分たちでやっていこうと1999年に設立されたのが「市民セクターよこはま」なんです。

江森：いやあ、思いに圧倒されますね。法律が整備されたということもあるのでしょうけど、当時社会的にもなかなか認めてもらえない中で活動されていた市民活動団体の方々の熱意が伝わってくるようです。

吉原：それまでは公的サービスというのはすべて行政が担っていて、保育園にしても特養にしても、自分の好きなのところを選ぶなんてできない時代でした。それが、自分の好きなのところを選ぶのはもちろん、やる気さえあれば自分が公的サービスの担い手にもなれるなんて、本当にそんな時代が来るの？って信じられない気持ちでした。でも3、4年経ってから立ち上げのときのビジョンを見てみたら、現実がビジョンを追い越してましたね。それぐらいエネルギーが溢れていました。

江森：次は「市民協働推進センター」の運営を担うとのことですが、これまでとはどう違うのでしょうか。

吉原：今までの市民活動支援センターは公設民営とはいえ、比較的自由にやらせてもらっていたので、横浜市の施設ではあるけ



れども、民に軸足をおくことが奇跡的にできていたんです。でも今度は、公設公民営と違って、行政職員と私たちが机を並べて仕事をするようになるんですね。話し合いの過程で一時はすごく揉めました。行政の施設を民間の感覚を活かしながら運営するからこそバランスがとれるんであって、そうでないなら私たちがやる意味はないと議論を重ねました。一方行政からは、より協働の相乗効果が得られる距離感について話があり、わたしたちもそれを理解し、一緒にやりましょうということになったんです。

江森：「協働」という言葉が一般的になってくるにつけ、対等の立場で協働するけど、やっぱり自分たちがコントロールしたいという行政の思惑が見えるときもありますよね。行政の下請けになるのではなく、当事者である民間のスタンスをキープしつつ、行政の立場も理解しながら、うまく協働していくことが民間側にも求められていると思います。

吉原：だからといっわけでもありませんが、

今回協働推進センターの事業とは別に、民間の支援センターを新市役所のすぐ近くに立ち上げることにしました。協働推進センターと支援センターを行き来することで、また新しい協働が生まれたいいなと思っています。

江森：市民活動支援センターの広報誌「animato」の最終号で、早稲田大学の石田光規教授が、これまで人類は「ひとりになる自由」を求めて社会を発展させてきたけれど、それは同時に孤独・孤立の不安を生み出すことでもあったというお話をされていてすごく共感しました。ちょうどいま新型コロナウイルスが猛威をふるっていますが、これだけ世界中に感染が広がるのはグローバル化の負の側面でもありますし、世の中の現象として常に表裏一体で、それが振り子のように振れることで私たちの生活にいろいろな影響が出てくる。その影響を緩和してくれるのが市民活動なのではないかと思っています。

吉原：学校が休みになるということで、子ども食堂やミニ学童のような取り組みが全国で立ち上がっていますよね。そこに共同募金が10万円を補助するという取り組みをいち早く始めて、2月下旬には募集が出ていたようですが、こういうところは民の力ですよね。すぐに立ち上がった人たちもすごいし、それに反応して素早く応援することを決めた共同募金もすごい。今回の新型コロナウイルスでも、3・11のときもそうでしたけど、なんとかショックと言われるようなことが起きたときに、まさに江森さんがおっしゃったように緩衝材になっているのが市民活動だと思っていますね。

江森：ようやくそういう社会になってきたということでしょうか。

吉原：昔からずっとそうやってきたんだと思っんですよ。江戸時代だって飢饉があつて孤児になってしまった子を村で育てようとかね。それを時代にあわせてやっていくということなんだと思います。どうしても制度というのは副作用を伴うので、制度外の支援というのが追いかけてこのように常に必要になるということですね。

江森：市民活動に終わりはないということですね。

吉原：それでも、20数年前に見た老人病院の光景というのは、100%ではないにしても改善されていますし、いろいろと歪みを生みながらも介護保険になったことで、介護される側もする側も楽になったというのは間違いありませんので、そういう意味ではいわゆる成熟社会の方向に向かって進んではいると思います。

江森：場所も名称も新しくなってこれからどのように活動されていきますか。

吉原：もっと大胆にダイナミックに考え、行動していきたいですね。普段物事を俯瞰して見ているつもりでも、どうしてもいるところから考えてしまいますよね。でもそれでは社会は変わらないと最近思うことがありまして…。今までよりもっと大きく社会を見られる立ち位置が与えられたと思っっていますので、それを活かしていきたいですね。

横浜市協働推進センター

6月29日(月)横浜市新市庁舎1Fにオープン

<https://kyodo-city.yokohama.lg.jp/>

協進印刷の広報サービス新ブランド5月11日スタート!!

私たち協進印刷では、紙の印刷だけでなく、広報誌や会社案内、CSR報告書などの企画、取材、デザインなど、企業様や団体様の広報に関するトータルなサービスを提供していますが、この度さらなるサービスの充実を目指し、新ブランド「cocollabo（ココラボ）」をスタート。5月11日からサービス開始します。

インターネットやデジタル技術の進歩で、紙媒体からデジタル媒体へのシフトが進んでいます。それにもなると私たちが提供するサービスもさまざまな媒体へと広がっています。「cocollabo」では、紙媒体

のデザインをベースに、WEBサイトやSNSへとクロスメディアに展開するサービスを中心に、得意分野である取材力を活かしたコンテンツ作成サービスにも力を入れていきます。

例えば、会社案内制作の場合、代表者様と関係部署数名の方に取材を受けていただくだけ。お客様には一切原稿をご用意いただくだけで、会社案内を完成させることができます。

CSR報告書の作成では、私たちのCSRマネジメントのノウハウを結集した本格的なPDCA型CSR報告書作成をサポート

トします。

「cocollabo」のもっとこの特徴は「ソーシャル・マーケティング」サービス。さまざまな地域主体との連携実績から導き出される、ソーシャルを切り口としたマーケティング手法をご提案します。

「cocollabo」は「Kyoshin Communities Collaboration」の略。すでに稼働中のクリエイティブ・プリンティングサービス「KCC（Kyoshin Creative Collaboration）」と並んで2つのサービスブランドで、ますます多様化するお客様のニーズに応えていきます。

KCC
Kyoshin Creative Collaboration

クリエイターのための
印刷サービス



cocollabo
Kyoshin Communities Collaboration

クロスメディア広報
サービス

ソーシャル・マーケティング
サービス

協進印刷



益者三樂 損者三樂

料理にまつわるエトセトラ

江森克治

週末限定とはいえ、れっきとした“家事”として料理をするようになって、かれこれ10年近く。我ながら腕をあげたものよなどと、自画自賛も甚だしいわけであるが、料理を始めて間もない頃、とある料理番組にイタリアあたりの主婦が登場し、「ブレンダー」という調理器具を使ってスープを作っているのを目撃した。ブレンダーとは、ミキサーの刃の部分だけを取り出して、その上に棒状の持ち手をつけたような調理家電で、食材をミキサーの容器に移すことなく、鍋の中の食材を直接つぶすことができるという代物。「ハンディーフードプレッサー」とも言うらしい。『じっくり時間をかけてミックスするのはマンマから家族への愛情の証…』とかなんとか囁きかけるナレーションにすっかりその気になってしまい、近所のヤマダ電機に急行して購入したのが「ブラウンマルチクイック5」。ブレンダーといえば、スイスのパーミックスが有名という店員さんの説明だったが、泡立て器と、みじん切りができる“チョッパー”がセットになっているところが魅力的で、髭剃りメーカーの製品で食べ物を作ることに若干躊躇しながらも、それに決めた。

包丁使いが覚束ない当時はみじん切りにも重宝し、チョッパーを使って自家製のサルサディップを作ったり、付属のレシピに載っていたマヨネーズに挑戦したりと、ブレンダーライフを存分に満喫したものだ。ところが料理の腕が上がってくると、みじん切りは包丁で切った方が大きさも揃うし、そもそもブレンダーを戸棚から出したり洗ったりという手間を考えると、自分で切ってしまった方が断然早い。マヨネーズは自分で作ってみるとあまりの油の量に驚き、わざわざ健康を害してまで食べるものでもないと思えてくる。

いまブレンダーで作るのはもっぱらスープ。日本では“ポタージュ”と呼ばれる素材が跡形もなくなる裏ごし系のスープ。裏ごしの代わりにブレンダーを使う。今回はいろいろ野菜のポタージュ。荒くつぶしたブロッコリーを添えて。

あなたの知らない ふおんとはなし

第一話 書体とフォント

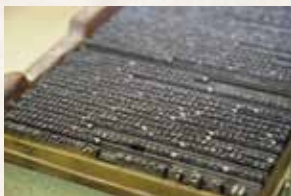
突然始まりました新シリーズ。少しは印刷会社らしい専門知識を披露するコーナーがあっても良いのではないかと、という企画会議での意見によってスタートすることになりました。

「書体」と「フォント」の違いわかりますか？「書体」とは、みなさんよくご存知の明朝体やゴシック体といった、「一貫したデザインの文字の集まり」のことを指します。狭義では、WindowsについてくるMS明朝やMacについてくるヒラギノ明朝などもそれぞれ書体です。別名「タイプフェイス」とも呼ばれています。

一方「フォント」というと、もとの意味は「同じ書体同じ大きさの活字のセット」のことだったそうです。若い方はご存知ないかもしれませんが、活字とは活版印刷に使う鉛で出来た直方体のコレです。かつては「初号明朝」や「5号ゴシック」などのように、書体と文字サイズごとに「フォント名」が違っていました。文字の大きさを変えるには、違う「物体」に取り替えなければならなかった活字時代と違い、現代ではコンピュータ上で文字の大きさを自由に変わることができるので、フォント名を使う必要がなくなりました。

いまでは「フォント（フォントデータ）」は、コンピュータ上で利用できるひとまとまりの書体データを表す言葉として使われています。コンピュータの登場は私たちの生活を大きく変えましたが、「書体」と「フォント」の関係にも少なからぬ影響を与えたようです。

「このフォントを明朝体に変えてください」という日本語、正しい？間違ってる？どっす思います？



Kyoshin TODAY

はまっ子未来カンパニープロジェクト

2016年度の第1回から協力している横浜市教育委員会による地域連携型のキャリア教育プロジェクト。2019年度は汐見台小学校、緑園西小学校、大口台小学校の3校の子どもたちと、街について、環境について、そして仕事について学びました。その中から汐見台小学校とのプロジェクトについて、「まちの先生」竹見からの報告です。

「総合の時間で地球環境について学習し、海洋ゴミに課題を感じた子どもたちは、近隣の調査を開始。街にはたくさんのごみ、特にレジ袋が散乱していることに気づき、レジ袋の削減が急務という結論に至りました。そしてレジ袋を減らすために、エコバッグを作って、まだエコバッグを持っていない人に使ってもらおうと考えました。

下の写真は北上産業株式会社
社の協力のもと、子どもたちが考えたデザインを自分たちでバッグに印刷するワークショップの様子。なぜエコバッグなのか、をみんなが考え尽くした上での印刷ワークショップだから、『どの授業にも増して真剣な顔をしています』と担任の先生。大人の私も五感をフル稼働させて子どもたちと共に走りきった半年間でした。」



10年目の台湾インターン生は林さん

台湾貿易センター・国際企業人材育成センターからの受入れを始めて早10年。10人目になる今年の研修生は、おっとりマイペースな林沂璇(りんぎせん)さん。研修課題は、日本に住んでいる中国語話者の方々の課題解決。台湾への旅行のニーズがあることをつきとめ、台湾紹介BOOKの作成へとごぎつげました。

休日には女性従業員といちご狩りを楽しむなど、今年も充実した3週間になりました。



「mioまもる」シリーズ販売開始

ありがとつの日から始まった「危険から身を守るシリーズ」が、「mioまもる」危険から身を守るアドバイスボード」と名称を改めてついに完成。販売開始しました。

住宅火災防火、熱中症予防、特殊詐欺予防、ノロウイルス予防という4つの観点から、高齢者が日常で直面する危険に対する啓発とアドバイスを目的としています。

各専門機関の監修のもと、信頼できる情報のみを掲載し、誰にでも読みやすいMUD(メディア・ユニバーサル・デザイン)を採用しました。手軽にできる貴社の社会貢献として、お客様や地元町内会、高齢者施設などに配布してみてはいかがでしょうか。



JO(ジェイ・オー)2020年4月号(第31号)
発行者：株式会社協進印刷
横浜市神奈川区大口仲町108番地
TEL:045(431)6611
FAX:050(3730)6273
URL: <http://www.kyoshin-print.co.jp>

